

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 萬宮健策 印

学位申請者 川本夢子

論 文 名

Formy zwracania się do innych we współczesnej polszczyźnie. Studium socjolingwistyczne
（現代ポーランド語における対称詞使用：社会言語学的考察）

審査の結果

本論文は、博士論文共同指導（コチュテル）制度に基づき、すでにヤギェロン大学において最終試験が公開審査として行われ、博士号授与にふさわしい学術的価値をもち独創的な成果である旨、ヤギェロン大学側の博士論文審査委員会が作成した最終試験の議事録および博士学位授与に関する決議書に記載されている。この結果をもとに、2024年7月25日、本学において、東京外国語大学側の最終試験を行った。匹田剛教授、金指久美子教授、福嶋千穂准教授、森田耕司准教授が審査委員を、そして萬宮健策が主査を担当した。

最初に、本論文執筆者の川本夢子氏から論文の概要が報告され、次に主任指導教員の森田耕司委員からヤギェロン大学での審査について報告があった。その後、各審査委員による質疑応答が行われた。

本論文は、対称詞使用に関する現代ポーランド語母語話者の言語意識を記述することを主な目的とした社会言語学的研究である。特に評価できるのは、その社会言語学的研究において、ポーランド語ナショナル・コーパスから抽出した606点のテキストデータ分析をはじめ、母語話者430名を対象としたアンケート調査、ビジネス特化型アプリ LinkedIn における203件のコメント分析、IT業界に勤める10名の参加者を対象としたインタビュー調査から成る4種の方法で得た独自のデータに基づき、量的・質的アプローチにより研究している点である。データの分析が詳細かつ緻密に行われており、論旨が明快で調査結果の出し方にも矛盾がなく、高い学術的意義を備えた論考といえる。

以上のような本論文に対する評価、および質疑応答における評価から、本審査委員会は川本夢子氏によって提出された論文が、博士の学位授与にふさわしい業績であると全員一致で判断した。

論文の概要

本論文の目的は、対称詞使用に関する現代ポーランド語母語話者の言語意識を記述することである。川本氏は調査を通して、上記のテーマに関する最新データの収集を行った。調査の対象は、ポーランドの政治体制が大きく変化した 1989 年以降の現代ポーランド語である。話し言葉に関する記述が主であるが、一部インターネット上でのやりとりに関する内容では書き言葉にも言及している。マスメディアを通じた情報伝達は調査の対象から外し、個人同士のやりとりに着目した。量的調査と質的調査を組み合わせることで、対称詞使用における現代ポーランド語母語話者の言語意識について、より正確な全体像をつかむことが可能となった。なお、本論文はヤギェロン大学のレナタ・プシブィルスカ（Renata Przybylska）教授と本学の森田耕司准教授による共同指導のもとに執筆された。

以下に本論文を構成する 4 章それぞれについて概要を述べる。

第 1 章 序論

研究テーマの選択意義、目的と調査対象を示し、仮説と研究課題も提示している。

第 2 章 用語の定義

この章では、「ポライトネス」「言語規範」「言語意識」「現代ポーランド語」「言語の民主化」「ビジネス言語」「対称詞」それぞれの用語について、本論文における定義を行っている。辞書の定義に加え、これまでにポーランド語研究者たちが独自に行った定義も考慮し記述している。

第 3 章 先行研究

この章では、最初にポーランド語の対称詞使用に関する先行研究をまとめている。発話行為としての対称詞使用を議論する上で基盤となるポーランド語のポライトネス・モデルを示し、他言語との対照研究や外国語教育の分野における研究にも言及している。

続いて網羅的な先行研究をもとに、ポーランド語の対称詞全体について記述を試みている。ポーランド語の対称詞は主に親称と敬称の 2 種類に分けることができるが、その中間に位置する対称詞として捉えられる表現や必ずしも親称と敬称の使用が対称ではないこと、また歴史的要素が対称詞使用に与えた影響なども議論の要となっている。

章のまとめとして、現代ポーランド語の対称詞使用における問題点を挙げている。多くの研究者がポーランド語のコミュニケーション場面における公私の境目が明確でなくなったことを指摘している。ポーランド語の伝統的なポライトネス・モデルを踏まえると、公的な場面は敬称（pan／pani）の使用と、私的な

場面は親称 (ty) の使用とそれぞれ結びつくのに対し、現代ポーランド社会では、例えば本来であれば敬称使用が求められるべき職場で、親称を使用する話者が増加したことで公私の境目が明確でなくなり、ゆえに対称詞使用の判断が困難となる状況も多くなってきた。また、語用論の観点から問題とされる現象の一つに、親称と敬称が混在した対称詞の使用がある。一例として、相手のファーストネームを敬称の pan／pani と結びつけた表現や、肩書を含む対称詞で敬称の pan／pani を省略した形などが挙げられ、これらは英語圏文化の影響だとする見方もある。一部の研究者は、現代ポーランド社会における親称使用の範囲の拡大は言語の民主化・アメリカ化を反映する現象としても捉えている。現代ポーランド語に見られるこのような変化には、最近のインターネットを用いたコミュニケーション形態も影響していると考えられ、世代差によってもまた、対称詞使用の言語意識に差が出るとされている。

第 4 章 調査内容とその結果

1) ポーランド語ナショナル・コーパスのテキスト分析

最初の調査として、ポーランド語ナショナル・コーパスから抽出した 606 点のテキストデータ分析を行っている。「親称 (ty) で」を意味する 2 つのキーワード (na ty および per ty) でコーパス全体を検索することにより表示されたテキストデータを分析した結果、親称を用いる関係性において話し手と聞き手を結びつける 3 つの重要な要因 (話者にとっての利益、楽しさ・自由さ、心理的距離感の近さ) があることが示された。ポーランド語話者は相手との関係性を築く上でこの 3 つを親称使用の判断基準にしていると考えられる。親称を用いる関係にあっても、プライバシーの境界線を越えることが必ずしも許されるとは限らず、特に話者が何らかの利益を目的として親称を用いている (表向きに距離を縮めているだけ) の場合、親称の使用は心理的距離の変化とは結びつかない。本コーパス調査から、飲酒の場や他文化との接触といった要素もまた、親称使用に関する言語意識の形成に関わることが示された。

2) アンケート調査

コーパスのテキスト分析に続く次なる調査としてアンケート調査を実施し、430 名の母語話者から回答を得た。33 の質問項目からなるアンケートをウェブサイト Ankieter.pl で作成し、Facebook および E メールを通して回答依頼とともに拡散させた。アンケートは 4 つのセクションから構成され、第 1 セクションでは年齢や性別をはじめ、居住地、学歴、外国語の知識、海外生活経験の有無に関する回答者の基礎情報を質問項目とした。第 2 セクションでは家族や教師、初対面の子どもに対する対称詞使用に関する質問を設け、続く第 3 セクション

では「親称への移行」に関する項目、第4セクションでは職場での対称詞使用に関する項目をそれぞれ設けた。アンケートの回答欄では選択式と自由記述式の両方を組み合わせてデータ収集できるようにした。

アンケートの回答結果から、現代ポーランド語母語話者が対称詞使用の際に最も意識している判断基準は、上下関係（年齢差や職場での地位によるもの）と場面の公私であることが分かった。その次に重要な基準としては、距離感、感情（主に怒りなど相手に対する否定的な感情）、性別や相手との関係性（親族関係、社会関係など）が挙げられる。また上記の基準と合わせて意識される重要な要素として、「仲間」と「他者」というカテゴリーが存在することも明らかとなった。話者が相手を「仲間」として扱うか、「他者」として見るかは個々の判断によって異なるため、このカテゴリー意識が、特にビジネスの場面で気まずさを生むと考えられる。

本調査では社会集団ごとの言語意識にも差が見られることが分かった。特に高年層は親称の使用に対し若年層よりも慎重である。しかしながら、若年層も上下関係や場面の公私といった基準を意識していないというわけではない。男女間においても差が見られ、男性の方がより親称の使用に対し寛容であることが明らかとなった。他の外国語との接触、特に英語との接触も対称詞選択の判断に影響を及ぼし、長く英語圏の文化と関わりがある話者は親称の使用をより寛容に受け入れる傾向にあるが、他方ポーランド社会におけるポライトネスの規範も明確に認識し、それに沿った言語行動を取ろうとしていることも分かった。

アンケート結果からは、現代ポーランド語母語話者が大人同士のやりとりにおいて対称性を意識していることも分かった。非対称な関係は子どもと大人の間で観察され、例としては学校や家庭内での関係が挙げられる。

3) ビジネス特化型アプリ LinkedIn のコメント分析

上述の2種の調査を踏まえ、ビジネス特化型アプリに寄せられた対称詞使用に関するコメント分析も行った。求職者と人事担当者のやりとりにおける親称使用の可否について、ある投稿文に寄せられた利用者のコメント203件を分析した結果、仕事上のやりとりにおいても、上下関係と場面の公私が対称詞選択の重要な判断基準になることが明らかとなった。特に職場のコミュニケーション場面においては、「仲間」と「他者」のカテゴリーが言語意識に大きく影響していることも強調すべき点である。求職者を「他者」として認識する担当者が一定数いる一方で、求職者を「仲間」として捉えることにより企業やチームの雰囲気合うかどうかの判断がしやすいと考える担当者もいることが分かった。

本コメント分析からは、多くのアプリ利用者がポーランド語の対称詞使用に関する規範と、英語圏の対称詞使用に関する規範の違いを明確に認識している

ことも分かった。特にポーランド語におけるファーストネームの使用に関しては慎重になるべきだとするコメントが複数見られたことは、ポーランド社会においてファーストネームが距離の近さを意味することの証明でもある。IT 業界では相手によらず親称の使用が好まれるとするコメントも見られたことから、この点については次の調査で詳しく扱うこととした。

4) インタビュー調査

最後に、参加者 10 名（女性 3 名、男性 7 名）を対象としたインタビュー調査を行った。参加者は全員 IT の専門家もしくは IT 関連業務に携わる人物で、主に職場での対称詞使用についての質問に対する回答を依頼した。インタビューは、あらかじめ設定した質問項目に回答しつつ、参加者本人が追加で話したい内容がある場合は、特に時間制限を設けず、話を続けることができる形式を取った。インタビューはボイスレコーダー及び Zoom を用いて実施・記録され、終了後に Word で発話を書き起こし、分析した。

インタビュー調査参加者の回答から、職場で相手の立場に関係なくすべての人物に対し親称を用いることが組織内で新しくルール化されている傾向が読み取れた。重要なのは、職場で初めて会う話者の間で、どちらかが明確に「親称への移行」を提案することである。特に、採用面接の段階で組織内の対称詞使用に関するルールに言及することで、その後のコミュニケーションにおいて気まずさを軽減することができる。

「仲間」と「他者」のカテゴリーが対称詞選択の判断基準となりうることは、先述のアンケート調査などからも明らかになった通りであるが、仕事に関わる場面では特にこのカテゴリーが重要な要素となることがインタビュー調査から分かった。誰を「仲間」と見るかという感覚は人により異なるため、顧客や採用候補者を最初から「仲間」として捉えることはリスクが高いといえる。

研究者たちが指摘している現代ポーランド語の対称詞使用における問題点として、英語の *you* とポーランド語の *ty* を全く同じものとして扱い、用法の違いなどが軽視されていることが挙げられる。本調査の参加者たちからは、職場での親称使用の範囲が拡大している理由のひとつとして、英語からの影響があるという回答があったが、これは外国語のルールをそのままポーランド語に適用しようとするものではなく、職場で英語を用いる機会が増えたことによる自然な結果であるという指摘があった。ビジネス市場のグローバル化に伴い、会議中に複数の言語を用いる場面も多くなったため、円滑なコミュニケーションを目的にすべての言語において親称使用を統一させようとする過程で、ポーランド語でも親称 *ty* が対称詞のスタンダードとして認識されるようになったのである。

本インタビュー調査から、コミュニケーション場面の公私によって対称詞を

使い分ける意識は、徐々に薄れてきていることも明らかとなったが、「他者」の存在を意識する場合には、普段親称で呼び合っている相手に対し、上下関係などに応じて敬称に移行する場合があることも明らかとなった。この場合の敬称としては肩書の使用が例として挙げられるが、pan/pani を省略した形も見られる。

第 5 章 結論

先行研究の記述および本研究で行った 4 種の調査の結果をふまえ、研究課題に対する答えは次のようにまとめることができる：

1) 親称の使用は何を意味するのか。

話者間に上下関係（年齢や社会的地位の差）がなく平等であること、もしくはコミュニケーションの場面がプライベートな場面であることを意味する。親称の使用は「仲間」と「他者」のカテゴリーで捉えることもでき、相手に対し親称を用い「仲間」として扱うことで、話者双方がどちらも同じコミュニティに所属していることを意味する。この「仲間」意識と親称使用との関係は、特に職場でよく観察される。

2) 「親称への移行」はどのような条件下で起こるのか。

上下関係における平等な立場、もしくはコミュニケーションの場面が公的ではないことを、話者双方もしくはどちらかが認めたときに起こる。また、話者が相手を「仲間」として捉え、「仲間」である人同士のグループに受け入れる際にも「親称への移行」が起こる。「親称への移行」を言葉で明確に提案する必要はないと考える話者も多いが、はっきりとその意思を伝えないことが原因で、対称詞の選択において話者が気まずさを感じることもある。上下関係（年齢や社会的地位の差）がある場合、「親称への移行」は上の立場にある話者が提案するものとされる。男女間では、性別は特に意識されない傾向にあるが、中・高年層には、「親称への移行」は女性から提案するものとする話者もいる。

3) 「親称への移行」は何を意味するのか。

上下関係がなく、話者同士が平等な立場にあらうとすること、もしくはコミュニケーションの場面が公的ではなくなることを意味する。精神的距離が近くなることを意味するケースもあり、この場合、それまで「他者」であった相手を「仲間」として受け入れる現象としても捉えることができる。仕事における人間関係で「他者」を「仲間」として受け入れる動機としては、楽さの追求（コミュニケーションの簡略化・簡素化）や精神的繋がり（寛容さ・誠実さ）への意志が挙げられる。場合によっては「親称への移行」が話者にとって何らかの利益を意味することもある。

4) 現代ポーランド語母語話者は、親称使用の範囲が拡大していることをどのように捉えているのか。

現代のポーランド社会において、「親称への移行」が早い段階（多くの場合、初対面の段階）で起こり、親称使用の範囲の拡大が速まっている傾向にあることが指摘されているが、話者たちはこの傾向を肯定的に捉えている。一方で「親称への移行」があまりにも早い段階で起こってしまうことは問題として否定的に捉える立場もある。職場においても親称使用は肯定的に捉えられているが、親称を用いる関係ではお互いの距離が近すぎるため、仕事上の改善点や問題点などを指摘しづらいと感じる話者も一定数見られる。

5) 現代ポーランド語母語話者にとって、最も重要な対称詞使用の判断基準は何か。

最も重要な判断基準は、上下関係（特に年齢差、場合によって社会的地位の差）の有無である。場面の公私もまた、重要な判断基準となる。その次に意識されるのが、距離感、感情、性別や相手との関係性である。仕事における人間関係では「仲間」と「他者」のカテゴリーも重要視され、場合によってはこのカテゴリーが上下関係や場面の公私よりも判断基準として優先されることもある。

第6章 おわりに

最後に「おわりに」として、論文全体を総括し、今後の課題を提示している。続いて、参考文献リストおよび辞書索引がまとめられている。

論文の評価および最終試験の概要

本論文は、すでに述べたように、対称詞使用に関する現代ポーランド語母語話者の言語意識について、より正確な全体像をつかむため独自に収集したデータを用いて行った社会言語学的研究である。

評価された点としては、以下のような点が挙げられる。

- ① これまで候補者が続けてきた現代ポーランド語の対称詞に関する莫大な記述の集積に基づいた研究の一つの集大成となっていること
 - ② 論文全体の論理構成が明解で、意味論的にも意義のある研究であること
 - ③ 複数の調査方法を駆使した多面的・多角的な研究であること
 - ④ データの分析が詳細かつ緻密に行われており、調査結果の導き出し方も適切で矛盾が無いこと
 - ⑤ 他言語との対照や他分野への応用も可能な研究成果となっていること
- ただし、次のようないくつかの問題点も指摘された。

- ① 用語の定義に曖昧な部分が残されていること

- ② 概念的枠組みが複雑化しているため、さらなる整理が必要であること
- ③ ポーランド語ナショナル・コーパスは、書き言葉のデータが中心であるため、話し言葉のデータ収集には限界があること
- ④ アンケート調査の対象者の基本属性（年齢や性別など）に一部偏りが見られること
- ⑤ インタビュー調査の対象者が IT 業界のみに限定されていること

審査委員による質疑応答では、主に研究手法やデータの内容について改めて問われ、川本氏はそれらの一つ一つに対して、自らの見解を丁寧に、また真摯に説明していった。

今回の最終試験では、ヤギェロン大学での最終試験の際にも指摘されていた、特に研究手法やデータの内容など、今後向き合っていくべきいくつかの課題を再確認することになったが、全般的には、これもヤギェロン大学での評価と同じように、本論文が新しい知見をもたらす独創性と高い学術的意義を備えた研究であるというのが、審査委員の一致した意見であった。

以上を踏まえて審査委員会は、全員一致で本論文を博士の学位にふさわしい重要な学術的成果であると判断した。